

原 著

受験生は作業療法をどのように理解しているか

井上桂子 古米幸好 東嶋美佐子 日比野慶子 藤澤智子

川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科

(平成7年10月18日受理)

How Much Do Examinees Know about Occupational Therapy ?

**Keiko INOUE, Yukiyooshi FURUMAI, Misako HIGASHIJIMA,
Keiko HIBINO and Tomoko FUJISAWA**

*Department of Restorative Science
Faculty of Medical Professions
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Oct. 18, 1995)*

Key words : occupational therapy, occupational therapist,
occupational therapy education

Abstract

The purpose of this study was to survey how much the examinees, who hoped to receive a university level occupational therapy education, understand about occupational therapy, in order to get some suggestions for the most suitable methods of education to be used after admission.

In 1995, 125 applicants who took examinations to enter our university were evaluated from their essays and a questionnaire they had answered about occupational therapy. The results showed that most of them had only a fragmentary and abstract knowledge of occupational therapy, and that they hardly knew anything about psychiatric occupational therapy. These results suggest that an occupational therapy curriculum must give students a concrete image of occupational therapy soon after their admission.

要 旨

我が国に4年制大学での作業療法士教育が誕生してまだ4年目である。4年制大学に作業療法士教育を求めている者が作業療法についてどのように理解しているかを知ることは、入

学後の教育方法に示唆を与えると考える。そこで、1995年の本学リハビリテーション学科作業療法専攻の受験生を対象に、小論文とアンケート調査で作業療法に対する理解の程度を調査した。その結果、受験生の大部分は作業療法について断片的な知識しかなく、その知識も具体性に欠けていた。また、精神障害領域の作業療法についての知識がほとんどなかった。入学後の作業療法士教育を効果的に進めるために、入学後早期から作業療法に対する具体的なイメージを持たせるようなカリキュラムの必要性が示唆された。

はじめに

作業療法士という職種が日本に誕生したのは1965年である。30年経過した1995年8月現在、全国の作業療法士は7,690名である。近年、リハビリテーションに対する社会的関心が高まるにつれ、リハビリテーションの一翼を担う作業療法(士)に対する関心も高まりつつあると思われる。しかし、街頭でのアンケート調査(岡山県, 94名)で作業療法士という職業を知らなかった者57.4%という福意の報告(1993)¹⁾にあるように、作業療法士が誕生して日が浅く、数も少ないことから、社会における作業療法(士)の認識は十分とは言えない。

作業療法士の養成は、1963年に厚生大臣指定の養成施設で始まり、その後1979年には文部省による教育が「大学短期大学部」で開始され、1992年から4年制大学での作業療法士の養成が始まった。本学でも今年度より「リハビリテーション学科作業療法専攻」という形で作業療法士の養成が開始された。1995年8月現在、全国の作業療法士養成施設・学校は、厚生大臣指定37校、文部大臣指定の短期大学13校、4年制大学8校である。これらの養成施設・学校の中で、養成が始まったばかりの4年制大学に作業療法士教育を望む者が、作業療法(士)についてどのような認識を持っているかは興味があるところである。

かつて、短期大学での養成が始まった当時、厚生大臣指定の養成施設の入学者に比べて、短期大学の入学者の中に「作業療法士になる」という目的意識が低い者がいる、大学卒業の資格を目的にする者がいるという声が聞かれた²⁾。「進路決定において何が何でも作業療法士というのではなく大学という要素(大学卒業の資格を目的にした進路決定)が見られる」という報告³⁾も

ある。また、進路変更のために退学、休学する学生が全国の作業療法士養成校平均よりも多いとの某大学短期大学部の報告⁴⁾もある。我々は、同じような現象が4年制大学にも起こるのではないかと危惧している。

我々は、入学して来た学生全員が、幅広い知識を身につけた作業療法士になることを教育目標としている。入学後の教育を効果的に進めるためには、作業療法士の業務内容を知った上で、その職に就くことを強く望む者が入学してくることが望ましい。4年制大学に作業療法士の教育を求めている者が、入学前に作業療法士の業務やその教育過程をどの程度知っているかを調査し、実態を把握することは、入学後の教育方法や今後の入試広報活動、作業療法広報活動に示唆を与えると考える。実態把握の一部として、今回、本学リハビリテーション学科作業療法専攻の受験生を対象に、作業療法士業務の理解度、教育過程の理解度などを調査した。また、比較検討のため入学後の学生を対象に作業療法に対するイメージ変化も調査した。

対象と方法

1. 対 象

受験生は、平成7年度に川崎医療福祉大学医療技術学部リハビリテーション学科作業療法専攻の前期一般入試(リハビリテーション学科は開設年であったため一般入試が前期と後期に分けて行われた)を受験した125名を対象とした。男性46名、女性79名で、年齢は17~25歳、平均年齢 18.4 ± 1.3 歳である。

入学生は、リハビリテーション学科作業療法専攻の33名、男性7名、女性26名、年齢は18~25歳、平均年齢 18.7 ± 1.3 歳を対象とした。

2. 方 法

小論文(500字)―設題:「リハビリテーショ

ン医療の場において作業療法士はどのような役割を果たしているか知るところを述べよ」一の記載内容を読み、作業療法士の役割を説明するために使用していた、対象、目的、方法についての用語・語句を抽出した。最初に受験生個人個人が使用していた用語・語句をそのまま書き出し、その後、書き出した用語・語句を類似語ごとにまとめた。

また、入試当日に無記名によるアンケート調査を実施した。質問は、(1)作業療法士の業務について何で知ったか (2)卒業時に受験する国家試験の難易度はどのくらいと予想しているか (3)作業療法士の資格取得についてどう考えているか (4)在学中の学習に医学教育の占める割合はどのくらいと予想しているか (5)在学中に臨床実習を行うことを知っているか、知っている場合は期間をどのくらいと予想しているか (6)3年制の作業療法士養成施設・学校(短期大学・専門学校)も受験するか、受験する場合は両方とも合格したらどちらに入学するか、とした。質問への回答はすべて選択肢法とし、(1)は複数選択、他は択一選択とした。

入学後の学生に対するアンケート調査は4月12日と7月26日の2回行った。4月の質問は、(1)作業療法士になることは第一志望か (2)入学前に病院などで作業療法を実施している場面を見学したか。7月の質問は、作業療法に対するイメージは入学前と現在で変化したか、それは何がきっかけか、とした。

結 果

1. 小論文の結果

1) 小論文は、記載内容から、次のa～eの5項目に分類できた。a. 身体障害の身体面に対する作業療法士の役割を書いている b. 身体障害の心理面に対する作業療法士の役割を書いている c. 精神障害に対する作業療法士の役割を書いている d. a b c以外の作業療法士の役割を書いている e. 作業療法士の役割を書いていない。aは94名(全受験生の75.2%)、bは95名(76.0%)、cは22名(17.6%)、dは7名(5.6%)、eは5名(4.0%)いた。精神障害に対する役割を書いている者は少なかった。

受験生全員を、記載していた項目で分類したものが表1である。身体障害の身体面および心理面への役割を書いている者(a b)が最も多かった(55.2%)。身体障害と精神障害の両方について書いている者は、身体障害の身体面と心理面および精神障害に対する役割を書いている者(a b c)7.2%と身体障害の身体面と精神障害に対する役割を書いている者(a c)8.0%との合計15.2%で少なかった。

2) 作業療法士の役割を説明するために受験生が使用した用語とその量(人数、受験生全体に占める割合%)を1)の項目a～d別に挙げたものが表2である。一番多かったのは「心理的支持」で65.6%、次いで多かったのは「社会復帰の援助」で身体障害と精神障害を合計すると53.6%になる。その他、「日常生活復帰の援助」「生きがい開発」「身体機能回復」が多かった。

3) 「作業を用いること」を作業療法士の役割として挙げた者は48名(受験生全体の38.4%)いた。このうち、単に「作業を通しての治療・訓練」18名(14.4%)、「粘土・手芸・絵画など(具体的作業名を挙げて)による治療」7名(5.6%)が約半数を占めたが、「作業を通して自然にコミュニケーションを図る」「一緒に作業することでコミュニケーションが取れる」「趣味を取り入れて行うので治療ということを忘れさせる」

表1 小論文の記載内容による受験生の分類

記載内容	人数	全受験生に占める割合(%)
a b c	9	7.2
a b	69	55.2
a c	10	8.0
b c	1	0.8
aのみ	6	4.8
bのみ	16	12.8
cのみ	2	1.6
d	7	5.6
e	5	4.0
合計	125	100.0

- a. 身体障害の身体面に対する役割を書いている
b. 身体障害の心理面に対する役割を書いている
c. 精神障害に対する役割を書いている
d. a b c以外の役割を書いている
e. 作業療法士の役割を書いていない

表2 作業療法士の役割を説明するために受験生が使用していた用語

用 語	人数	全受験生に占める割合 (%)
a. 身体障害の身体面に対する役割		
社会復帰の援助	53	42.4
日常生活復帰の援助	33	26.4
職業復帰の援助	7	5.6
家事復帰の援助	2	1.6
身体機能回復	26	20.8
身体機能維持	5	4.0
手の機能回復	14	11.2
残存能力開発	12	9.6
装具・自助具の考案・作成	9	7.2
家屋改造指導	2	1.6
b. 身体障害の心理面に対する役割		
心理的支持 (心の支え, 不安・悩みの軽減等)	82	65.6
生きがい開発	27	21.6
趣味活動指導	2	1.6
c. 精神障害に対する役割		
社会復帰の援助	14	11.2
職業復帰の援助	3	2.4
精神機能回復	8	6.4
生きがい開発	2	1.6
作業訓練	1	0.8
生活訓練	1	0.8
d. その他の役割		
知的障害者の援助, 信頼関係を築く, 社会と障害者をつなぐ, 人間らしい状態に戻す, 思いやり, 患者教育, 人間の持つ無限の力を引き出す	各1	0.8

などの記載もあった。

2. 受験生アンケートの結果

1) 作業療法士の業務を何で知ったかは、図に示すように、1番多いのは「家族・知人から聞いた」、2番目に多いのは「医療関係者から聞いた」であった。次いで「病院見学」「雑誌」「テレビ」「学校案内」と続く。

2) 国家試験の難易度の予想は、「非常に難しい」21.0%、「難しい」57.2%、「普通」20.2%、「簡単」1.6%、「非常に簡単」0%であった。「非常に難しい」と「難しい」を合計すると78.2%で難しいと予想している者が多かった。

3) 資格取得については、「是非取得したい(部活動・アルバイト等が犠牲になっても是非取得したい)」が91.1%、「できれば取得したい(普通に大学生生活を楽しみながらなおかつできれば

取得したい)」が8.9%、「あまり意識しない(国家試験は意識していない、大学が卒業できればよい)」は0%であった。

4) 在学中の学習に医学教育の占める割合についての認識は、「非常に多い」17.2%、「多い」64.8%、「普通」11.5%、「少ない」4.9%、「非常に少ない」1.6%であった。「多い」と「非常に多い」を合計すると82.0%で多いと予想している者が多かった。

5) 臨床実習についての認識は、「臨床実習を知らない」16.1%、「1ヵ月程度」4.8%、「3ヵ月程度」24.2%、「6ヵ月程度」54.8%であった。受験生の多くがあることを知っており、しかもその期間は長いと予想していた。

6) 3年制の養成施設・学校も受験するかは、「3年制も受験する」69.4%、「3年制は受験し

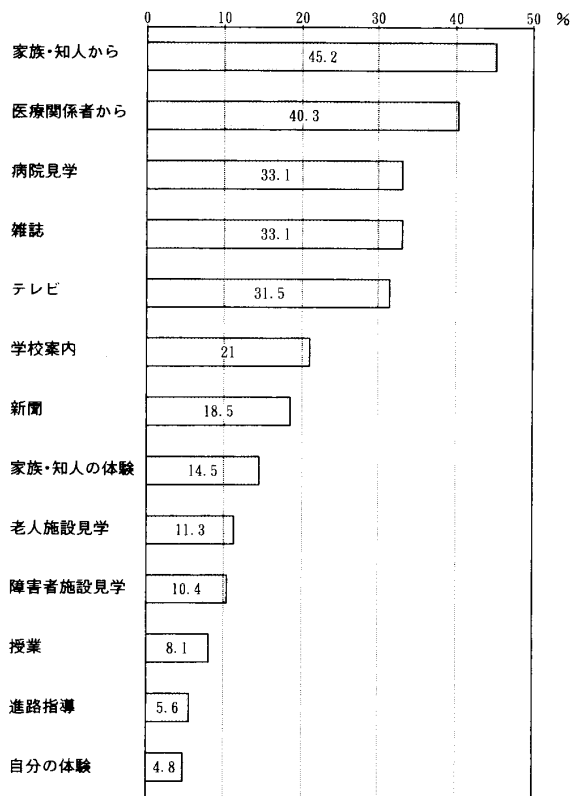


図 作業療法士の業務を何で知ったか

ない」30.6%であった。両方とも合格したらどちらに入学するかは、「4年制大学を選ぶ」56.5%、「3年制を選ぶ」12.9%であった。「3年制は受験しない」と「4年制大学を選ぶ」を合計すると87.1%であった。

3. 入学生アンケートの結果

1) 4月アンケートの結果

「作業療法士が第一志望かどうか」については、第一志望と答えた者は22名(66.7%)であった。第一志望でないと答えた者の、第一志望は医師3名、理学療法士3名、教師2名、建築士1名であった。無回答が2名いた。

「入学前に病院などで作業療法の見学をしたことがあるか」は、「ある」15名(45.5%)、「ない」18名(54.5%)であった。

2) 7月アンケートの結果

「作業療法に対するイメージは入学前と現在で変わったか」で、「変わった」と答えた者は21名(65.6%)であった。「どのように変わったか」は表3に示すように、「思っていたより作業療法の範囲が広い」「思っていたより作業療法士にな

表3 入学後に生じた作業療法に対するイメージ変化の内容

イメージ変化の内容	人数
作業療法の範囲が広い	9
作業療法士になるための勉強が大変	5
理学療法との重複部分がある	3
雰囲気が明るい	3
作業療法士になりたいと強く思う	2
あまり知らなかったがわかるようになった	2
作業療法士は高度な職業	1
障害の治療だけでなく残存機能を生かす	1
作業という言葉のイメージ	1
精神面も扱う	1
やりがいがある	1
責任感が必要	1

るための勉強が大変」が多かった。「入学前より作業療法士になりたいと強く思うようになった」「思っていたよりもやりがいのある職業」などという答えもあった。

「なにがきっかけで変わったか」は、1年前期の講義「作業療法研究Ⅰ」の中で行った作業療法見学を挙げた者が多かった(18名)。その他は、作業療法研究Ⅰでのレポート作成3名、ビデオ2名、他の専門科目(解剖学、生理学、リハビリテーション総論)の授業・試験3名であった。

考 察

作業療法士の業務分野は大きく2つに分けると身体障害と精神障害であるが、その両方の役割を小論文で記載した者は受験生全体のわずか15.2%であった。表1に示したように、業務の一部分のみの記載で終わっている者が多かった。このことから、受験生の作業療法士の業務に対する理解は断片的にしか得られていないことが伺える。これは、入学生の7月調査結果で作業療法に対するイメージ変化が起こる率が高く(65.6%)、イメージ変化の内容を「作業療法の範囲が思っていたより広い」と答えた者が多かったことにも裏付けられる。受験生の作業療法についての情報源が「家族・知人から聞いて」「医療関係者から聞いて」という個人情報が多いため、断片的な理解になっているものと思われる。

小論文の記載内容では、身体障害の身体面に対する役割を書いている者と身体障害の心理面に対する役割を書いている者は共に受験生全体の約3/4あったが、精神障害に対する役割を書いている者は2割弱と少なかった。これは、現在我が国で医療施設に勤務する作業療法士の身体障害領域（小児および老人を含む）と精神障害領域との配置比4：1⁵⁾に影響を受けていると考える。すなわち、精神障害領域で働く作業療法士が少なく、精神障害領域での作業療法士の役割について見聞する機会が少ないためであろう。

作業療法士の役割の説明に使用していた用語では、「心理的支持」が最も多かったが、これは作業療法士の役割について何か書こうとしても具体的な業務内容を多くは知らないため、規定文字数を埋めるために「つらいリハビリの間の心の支えになる」ことを書いた答案が多くなったものと思われる。「心理的支持」も重要な役割の1つではあるが、それだけではないことを強調したい。また、リハビリテーションを説明するために一般的によく用いられている「社会復帰への援助」も多いが、社会復帰への具体的方法の記載は少ない。中には、「日常生活復帰への援助」「職業復帰への援助」「家事復帰への援助」「装具や自助具の考案と作成」「家屋改造の指導」などという具体的な用語を使用し例を挙げながら記載した者もあり、身体障害領域に限っては理解が進んだ受験生もいたと思われる。

作業療法士の役割について何らかの記載をした者が受験生全体の96%いたことは、山田ら³⁾の「当大学短期大学部作業療法学科1981～83年の入学生の調査で入学前に“作業療法について知らなかった”者が36.5%いた」報告と比較すれば、この10数年で作業療法についての社会的理解は進んだとも考えられるが、受験生の具体的な業務内容に対する理解はまだ低いと考える。

作業療法の情報源については、「家族・知人から聞いた」「医療関係者から聞いた」が多い。口コミによる情報が多いことが示唆される。「テレビ・雑誌・新聞」のマスコミ関係が多いのは山田ら（1983）³⁾や真木ら（1988）⁶⁾の報告と同様である。「病院見学」は受験生全体の約3割、「障

害者施設見学」「老人施設見学」はともに約1割と少なく、これが具体的業務内容の理解の低さに結びついていると思われる。入学生の調査でも「入学前に病院などで作業療法の見学をしたことがある」は45.5%であった。受験前に作業療法場面を複数箇所で見学し、作業療法士の業務内容を知った上でその職に就くことを強く望む者が入学してくることが望ましい。また、「進路指導」によるものは5.6%で、真木ら⁶⁾の「1981～87年の7年間の入学生のうち進路指導で作業療法士を知った者は1.6%」という報告と同様に非常に少ない。（社）岡山県作業療法士会では広報活動として、岡山県下の全高等学校に作業療法（士）を紹介したパンフレットやポスターを送付したが、その効果はあまり現れていないと思われる。今後、高等学校の進路指導担当者に対するさらなる広報活動が必要と考える。進路指導担当者の作業療法（士）への理解が深まれば、受験生の適性に応じた適切な進路指導がなされるであろう。

作業療法士教育過程の理解度については、「国家試験は難しい」「医学教育の占める割合は多い」「臨床実習は長い」と意識している者は多く、ある程度の理解はなされていると思われる。しかし、入学生7月アンケートの結果で「思ったより勉強が大変」という答えが多く、受験生の考えはまだ甘いところがあると思われる。

作業療法士の資格取得に対する意識は、「部活動やアルバイトが犠牲になっても是非取得したい」者が9割以上に及んでいた。また受験生のうち69.4%の者が3年制の作業療法士養成施設・学校も受験すると答えている。3年制の養成施設は受験しないと答えた者が他の大学を受験するのか、その学部が何かは調査していないので、受験生の中に“何が何でも作業療法士になりたい”という者がどの程度いるかは正確には不明である。また、比較する資料が少ないため、これらの数値から、本学受験生に“何が何でも作業療法士”という者が多いのか少ないのかを判断するのは難しい。しかし、他の作業療法士養成施設・学校も受験すると答えた、全受験生の約7割の者は作業療法士指向が固まっていると考える。また、入学生の調査で66.7%の

者が作業療法士が第1志望だったと答えている。「3年制養成施設は受験しない」と答えた者と「3年制も受験するが両方とも合格したら4年制大学に進む」と答えた者の合計は受験生全体の87.1%を占めているので、本学受験生は大学指向が強いと考える。「当校(某大学短期大学部)以外の作業療法士養成校の受験をした者13.5%、当校以外の大学(作業療法士養成校ではない)受験をした者86.4%という結果から、当校入学者は何か何でも作業療法士という進路選択ではなく大学という要素がみられる」とする山田らの報告(1983)³⁾や「1981~87年の7年間のうち当校(某大学短期大学部)以外の作業療法士養成施設を受験した者が一番多かった年は22.2%、当校以外の大学(作業療法士養成校ではない)受験をした者が一番多かった年は92.9%」とする真木ら⁶⁾の報告と比較すると、本学の受験生は作業療法士指向も大学指向も共に強い者が多いと考える。これは、時の経過で作業療法(士)の社会的認識が高まったこと、就職難の社会的背景(作業療法士の需要は今のところ多い)などの影響と考えられる。

今回の調査で、平成7年度の本学リハビリテーション学科作業療法専攻の受験生は、進路選

択において単に「大学」ではなく「作業療法士」を選んだ者が多いことが示唆されたが、作業療法士の具体的業務内容についての理解は低かった。入学後の作業療法士教育を効果的に進めるには、入学当初から「作業療法士になる」という目標を持たせ、かつ目標に到達するための努力が続くよう動機づけることが必要である。我々はこれまでに、効果的な動機づけの方法を検討するために作業療法士養成施設の学生に対してアンケート調査を行ってきた。その結果、入学当初の学生は作業療法に対する理解が浅薄で、そのために目的意識が不明確になっていること、臨床実習を代表とする自らの体験を通じた経験が作業療法に対する理解をより具体的にし、学習意欲を高めることがわかった⁷⁾⁸⁾⁹⁾。そのため、入学当初から作業療法の臨床見学を実施し成果を得てきた¹⁰⁾¹¹⁾。本学リハビリテーション学科開設にあたり、その実績を生かし、入学当初から、作業療法の臨床見学を作業療法科目「作業療法研究Ⅰ」の一部に組み込んだ。入学生の7月アンケート調査結果からその効果はある程度は認められていると思われる。今後も学生の目標到達への努力が続くような動機づけの方法を考えていきたい。

文 献

- 1) 福意武史(1993)リハビリテーションおよび作業療法の認識度調査。作業療法おかやま, **4**, 17-22.
- 2) 鈴木明子(1989)専門教育により高さを求めて。作業療法ジャーナル, **23**(9), 636-639.
- 3) 山田 孝, 丸谷隆明, 末永義圓, 深沢孝克, 真木 誠, 藤川 緑, 上野武治, 大宮司信, 黒澤辰也(1983)作業療法はどのように見られているか。作業療法, **2**(2), 9-15.
- 4) 村田和香, 山田 孝(1989)短期大学における作業療法教育と学生の職業選択における問題点。作業療法, **8**(5), 700-707.
- 5) 日本作業療法士協会企画調整委員会(1995)作業療法士の職域拡充について(答申)。作業療法, **14**(2), 179-193.
- 6) 真木 誠, 山田 孝(1988)作業療法はどのように見られているか? (4)。作業療法, **7**(2), 539-540.
- 7) 福意武史, 東嶋美佐子(1990)当学院学生の作業療法に関する意識調査—学年間の比較—。作業療法おかやま, **1**, 84-90.
- 8) 満田まゆみ, 福意武史, 井上桂子, 東嶋美佐子(1991)当学院1年生のOTに関する意識調査—経時的変化—。作業療法, **10**(特), 340.
- 9) 福意武史, 井上桂子, 東嶋美佐子, 日比野慶子(1992)当学院2年生におけるOTイメージとOT選択是非の推移。作業療法, **11**(特), 347.
- 10) 井上桂子, 福意武史, 東嶋美佐子, 日比野慶子, 古米幸好(1992)1年生学内臨床実習の紹介とその教育効

果の検討. 作業療法, 11(特), 349.

- 11) 井上桂子, 福意武史, 東鳴美佐子, 日比野慶子 (1993) 入学当初から実施した臨床見学. 作業療法おかやま, 4, 49—53.